

資 料

沖縄国際大学創立 40 周年記念事業／沖縄法政研究所 第 32 回講演会 「復帰 40 年」屋良朝苗が遺したもの

開催日時：2012年11月6日(火)

午後2時40分～午後4時10分

会 場：沖縄国際大学3号館105教室

〔講演要旨〕

沖縄は戦後 27 年間、米軍の統治下におかれ、県民の自治権は大きく侵害、制約された。そのような状況のなかで沖縄は、1967 年の「教公二法」を阻止し、翌 68 年には主席公選を勝ち取り、屋良朝苗行政主席を誕生させた。さらに 1972 年には「日本復帰」を実現させた。

しかし、屋良朝苗は、1976 年の沖縄県知事退任挨拶で「勝ち取った復帰であったが県民が求めた復帰にはならなかった」と悔恨の思いを表した。知事退任時、屋良さんを励ます会事務局長を務めた石川元平氏に、「復帰のなかみ（基地のない沖縄）を勝ち取るのは、君たちの大きな責務だよ」「二度と沖縄が国家権力の手段として利用され、犠牲を被ってはならない」と、言い残したという。

本講演会では、屋良朝苗の遺志を受け継いで活動されてきた石川元平氏が、米軍統治下で闘ってきた屋良朝苗の「運動力学」を紹介し、参加者とともに「復帰 40 年」を検証する。

沖縄国際大学創立40周年記念事業／沖縄法政研究所第32回講演会

「復帰40年」屋良朝苗が遺したものの

講師：石川元平

元沖縄県教職員組合委員長
元屋良さんを励ます会事務局長

こんにちは。御紹介いただきました石川でございます。現在、宜野湾市の愛知に在住しております。今日は、冲国大の大切な事業の一環として「復帰40年」屋良朝苗が遺したものという、これは私にとっても非常にありがたいお話をする機会を与えていただいて、恐縮でございますが、制限時間いっぱいお付き合いをお願いしたいと思います。

本当にこんなに立派な資料もおつくりいただいて恐縮ですが、この出典は屋良先生がお亡くなりになった後、県民葬というのを初めてやりまして、これは保存版として作成したものであります。これに私自身が関わりましたので、出典はの中から貴重なものを皆さん方にコピーして、おあげしています。ぜひ、保存版として御利用いただければと思います。

それでは今日あげました私のレジュメ、本当に、これだけの話を1時間そらで、本当は何時間分もあるんですね。ところが一応、こういう項目だけでも挙げないことには、屋良先生を語るということにはまたならないという、強い思いもいたしましたので、出生から今日に通ずるお話まで今日は話させていただきたいと思いません。

まず、屋良朝苗、1902年、ちょうど今から110年前に読谷村字瀬名波の俗称はカーピラヤードウイという、そこに生を受けまして110年です。沖縄教職員会を設立しましたのが1952年、琉球政府と一緒にです。それからちょうど60年目です。それで沖縄復帰40年という、3つの大きな節目の中で今日はお話をさせていただきます。屋良先生の生家はカーピラヤードウイ、残波の付け根にあります。現在は、長

浜におりていく県道になっていますが、一部、屋敷跡が残っておりまして、朝乗というお兄さんがおられました、その家は生家の近く瀬名波川平にあります。屋良朝苗の人格形成に深く影響を与えたのが私はあの残波の荒磯だと思えます。屋良朝苗先生と接された方はその人柄、やはり接するだけで感ずるのがありますけれども、不屈、それから反骨、レジスタンス的な反骨ですね、そして強靱な心身、こういうことであらわすことができると考えています。酒、たばこは一切やりません。四六時中、沖縄をどうするか、教育、子どものことだけです。「屋良天皇」と呼ぶ人もいましたが、それほどまでに近寄り難い存在だったということでしょう。そういうことだけで本当に人間暮らせるのかと思う、こういう思いを傍目で感じてまいりました。一コマにあったものは、その厳格な屋良朝苗のもとで厳しさも十分味わってきました。屋良先生は厳父と慈父という二つの顔をもっていました。私たち若い職員が酒の勢いで自宅に押しかけたことなどもありますけれども、「いらっしゃい、いらっしゃい」とまるで慈父のごとく歓待してくれるんです。沖縄的に言えばアルムンネームンごちそうして、あとは文句の一つも言えずに「ごちそうになりました」「君たちにはいつも苦勞をかけてすまんあ」その一言で私たちはすっかり癒されて、また次へという、こういう思いを抱かせた方でもありました。苦学して、広島高等師範学校（現在の広島大学）に行く…、いろいろ考えたようですが、教師になることを決意して広島高師に進みます。詳しいことは申し上げられませんが、沖縄師範学校の時代には波之上相撲の花形だったんだそうです。広島高師では柔道の先鋒を。こういう写真がたくさん残っています。

広島高師卒業後、県内においては、沖縄県立一高女の教員を務めます。それから県立二中の教員を務めます。県立二中の教員時代と言えば、御存じの方も多いと思いますが、西銘順治さんの恩師にあたるわけです。いわゆる師弟関係。これは68年の主席の公選でぶつかるといような運命にもなるわけですけれども、戦前、県内での御本人の専門の科学教育がこれからというときに、植民地台湾、台南二中の教員になります。これはお読みになった方もおられるかもしれませんが、「新沖縄文学」60号の紹介をしておきます。これは知事退任後でありましたけれども、「この校正は石川君、きみに任せる」、とおっしゃるものですから、台湾から引き揚げて、知念高校時代に踏み込んだものを私が削除したら、ああ、それでいいという

ことになりました。植民地台湾における教育、特に台南二中における科学教育が台湾全土にかなり知れ渡りまして、毎回のようにその展示物等が賞を獲得、学校に対する視察等々が相次いだようです。ところが、台湾総督府から、総督府命令ということで台北師範に抜擢されます。中学校から師範教授への抜擢です。もうこのときのお話は、この本にもありますけれども、離任に当たっては、台南駅には全校生徒が集まって先生との別れを惜しんだというのです。そのときの様子についてはご家族からも聞かされましたけれども、まるで汽車と一緒に全校生徒が怒濤のように走ったという、ドラマチックな話です。台北師範時代の教え子は県内にもたくさんいます。教職員会の教育文化部副部長をした後、島尻養護の校長もされた金城順亮先生、彼もそうですし、それから沖縄タイムスの元教育担当記者、それから後に編集局長、専務などをされた宮城鷹夫さん、それから山中貞則元沖縄開発庁長官などが台北師範時代の教え子ですね。私が屋良朝苗を評価する大きな原点は、戦争によって生徒たち、沖縄県民も犠牲者が4分の1います。生徒も教職員も、少なくとも4分の1が亡くなったんです。戦後、生き残った人たちはほとんど教壇にカムバックしていますが、もとはといえば軍国主義教育に加担した人たちですよ、ある意味で当然のことながら。ところが屋良朝苗が植民地台湾でやった教育というもの、他府県人、沖縄人、台湾人が雑居する中で、決して差別されないような、本人が差別しない教育を徹底した、人間教育でした。ここのところが私が屋良朝苗を評価する点です。これは私がただ一方的に言うのではなくて、戦後の教え子たちの屋良朝苗に対する関わり方を見れば明らかなんです。例えば68年に屋良が主席に当選をしました。すると、現在、屋良家の「家宝」?になっている漆の屏風があります。台湾翡翠と珊瑚を散りばめた、山水の絵が描かれたものです。当時1,000ドルを下らないという、その漆の屏風を当選のお祝いに送ってきたり、後に、御夫婦は台湾の教え子たちに招待をされる。それから県民葬のときも、教え子の代表が何名も来たんです。ですから、いかに屋良朝苗が差別しない人間教育を徹底したか。そして事実、この教え子たちから、たくさんのお医者さんを初めとした、方々を輩出しているんです。台南二中というところはディキヤー学校、有名学校だったそうです。90%は地元台湾の出身です。そうでありながら、日本本土の教員は目に余る差別教育を一方ではしていた。敗戦の8月15日のことです。この本の中にも書かれ

ていますけれども、台湾人に対する差別教育をした、日本の教師は、台湾の青年たちからものすごい身体的な暴行等を受け、教師本人にとどまらず、家族ぐるみで詫びをさせられたようです。その後、逃げるようにして本土に引き上げていったという。屋良朝苗が台湾から引き揚げてきたのは終戦翌年の46年の末です。こういうことについても御承知おき願えたらと思います。

さて、46年暮れに引き上げてきて、沖縄はあちらこちらに収容所ができていましたね。私は、国民学校の1年生でしたけれども、羽地の田井等収容所に入りました。そこで収容所の仮の学校に通いました。テントの中で最初に習ったのは賛美歌でした。屋良先生は台湾引き上げ後、田井等高等学校の教官が初めてですね、それから知念高等学校の校長になる。知念高等学校といっても、与那原の現在地ではなく、玉城の親慶原に知念高校があった時代です。知念高校長時代の話も有名です。校舎の建設から教材教具の手造りまで生徒と共にやり、生徒に学習に打ち込んでもらうために、当時困難な水汲みを校長が夜中にやったというのです。いつもドラム缶に水がいっぱい入っているのを不思議に思った生徒たちは、ある夜、屋良校長の水汲みの姿を見ることとなります。私は、屋良先生の戦後沖縄の教育と子どもたちに寄せる原点“一条の光”（後述）を見る思いが致します。そのときの教え子の中に安次富長昭先生などがいます。忘れないうちに語りますが、私が身に付けているこれが68年の主席公選のときの安次富長昭先生のデザインによる屋良さんを励ます会のバッジです。

沖縄県は戦後いろいろ変遷がありますけれども、50年に戦後初めて、沖縄、宮古、八重山、それから奄美と、4群島政府時代に初めて公選が許される時代があるんです。知事の選挙、平良辰雄という知事が沖縄群島政府知事として誕生しました。大宜味の津波の御出身です。その平良知事から要請されて、当時の教育の最高責任者、文教部長に引上げられます。ところが当時の施政権者の米側は、まさか4群島政府の知事、その知事たちが日本復帰を主張するとは考えていなかったようです。

たちまちのうちにその群島政府にかわる臨時中央政府になり、あと翌年の52年4月1日に琉球政府が発足をしていくことになるわけです。屋良沖縄群島政府文教部長になって、まず、すべて灰燼に帰した教育環境、学校校舎だけではなくて、無からの出発でありましたので、まずは教育条件整備から、教育用具、教科書等々、こ

ういうことから手始めにやりたいし、それから平和憲法、教育基本法体制下の、日本本土の状況を、知るようになって、文教部長の屋良は何とか本土の新教育の息吹を呼び込みたいということで研究教員制度とか、本土との交流を模索するわけだけれども、ことごとくこれは米国民政府に邪魔をされていたという。米側がいうには、日本本土は民主主義国アメリカからいろいろ勉強しているんだ。アメリカが直接支配している沖縄に在っては、アメリカ側から直接学ぶほうが最も民主的な教育ができるんだというふうな嘯き方まで実はやっているんです。こういう対応の中で、屋良は野に下る決心をして52年4月1日、これは琉球政府発足と一緒にですが、沖縄教職員会専任の会長になる。時間の都合で、その教職員会の前に教育連合会、教育後援連合会、今のPTAです。こういうものも実はあるんですが、本格的に戦後復興と子どもたちの教育に取り組み始めたのが52年の屋良朝苗が教職員会会長になって後のことです。あと、これから話を進めてまいります。

さて、IV. 戦後沖縄での再出発ということで、一条の光、教育と子どもたちに沖縄の未来を託した屋良朝苗ということで取り上げました。昨年9月9日の琉球新報で、一条の光『屋良朝苗日記』の連載が始まりました。これは毎月第2、第4の金曜日に連載し続けて、来る金曜日は28回目になります。これは126冊の屋良朝苗日記をもとにして、琉球新報が復帰40年ということを念頭に置いて文化部長を中心に進めているものです。私に事前に相談があって、企画が進んだことから、最初のコメントは私のほうでやらせていただきました。一条の光、これは当時、特に若い皆さんは想像できないでしょうけれども、施政権をアメリカが握っている、しかも軍事占領下です。復帰なんて、実現することなんて全くわからない。いわば、闇夜のような状況の中で教育をする、あるいは復帰運動を進める。屋良先生はいつも自動車のヘッドライトの例え話をしておりました。暗闇を走るにはヘッドライトがないと走れない。同じように、モヤに包まれて目標は復帰ということがあるんだけど、この子どもたちを、他県の子どもたちと同じように日本国民として教育をし、復帰を勝ち取るためには、教育と子どもたちに願いを託さなければならない。託するその思いを一条の光に例えたわけです。こういうことで連載のタイトルも「一条の光」、これは皆様方にお配りしている資料の屋良語録の中に出てきますから、後で御確認いただければと思います。いわゆる屋良朝苗に代表される沖縄教育界が目指

した復帰であります、これも4項目挙げさせていただきました。その中で(4)に1952年、これは1月です。これも皆さん方にお配りしている資料の中に、非常に貴重なものですから、全文掲載をさせていただきました。当時、その場に接した人たちの思い、第1回、第2回と進んで、第3回の全島校長会における屋良演説は、火を吐くような演説であったといわれます。その場所が琉球大学の体育館です。会場全体がそういう熱気に包まれた。そこで詠んだ、当時恩納村の山田小中学校の屋宜盛徳校長が詠んだ琉歌も添付してあります。「むしかアメリカぬ 聞かんどんあらば 沖繩まんがたみ 大和渡ら」、ウチナーを真んがたみして、大和に渡ろうという、復帰に対する熱い思いが充満していた。こういう熱気をつくったのが、火を吐くような屋良演説であったという。これは11ページを御参照いただきたいと思えます。

さて、復帰、それから教育、子どもたちなど具体的な運動の進め方。そのために運動の拠点づくりをどうやっていったか、それが2.の(1)から(6)までであります、これもざっとごらんいただければ、今のお若い皆さんはびっくりするのではないのでしょうか。戦後50年に至るまでの、私が最初勉強したのは海岸での砂文字からですよ、無一物で校舎も教室も何もない時代ですからスタートは青空教室です。あとガリ版刷り教科書です。首里城趾の赤木というのが記憶に残っています。教科書も本土から自由に沖縄に取り寄せられない、言うならば外国です。輸入という言葉を使いました。商売人はアメリカにねらわれる。勇気を持って本土から教科書輸入などをする会社はない。どうしたかといったら、学校の教職員が株を買って、本土から教科書を輸入するために、1950年琉球文教図書株式会社をつくったんです。当時有名なヤンバルの當銘由金という久志出身の校長を社長に、あと山川校長などがたしか常務、何名か復帰後ですが、私も8年間、取締役役に名を連ねたことがあります。文教図書につづいて、沖縄の教職員集団は1951年には沖縄教職員共済会を設立しました。50年代の初めごろまで、たばこ1カートンが200円ぐらいだったというんですが、教員の月給がたばこ1ポールの代です。これでは家族も養えないということで、当時、僕らもよく覚えておりますが、先生方は鳥を養ったり、ウサギやヤギを養ったり、いろんなことをやって、自給自足をしていました。それでもどうしようもないから、約3割は学校を辞めて、軍作業に。そのままずっと軍作

業に残った人たちもいますが、ほとんどはカムバックしましたけれども。そういう劣悪な経済生活の時代で、これでは安定的な子どもたちの教育ができないということで、教職員は当時1ドルの金を出し合って共済会を設立しました。共済会から金も借りられるようになる。要するに銀行のような業務です。これは全国的にもユニークな互助組織です。現在でも健全に推移しておりますが、八汐荘の1階にあるのが教職員共済会。ということ、この八汐荘建設についても、ぜひその建設の経過について知ってほしいと思います。沖縄には50年代の後半になっても教職員の宿泊と研修施設がありませんでした。屋良会長は「八汐荘」建設を要求して不退転の決意で「50日間」にわたって文部省に座り込みをしたと伝えられています。「八汐荘」はこうして、本土からの公的資金で1960年に建設されました。八汐荘建設が日政援助の呼び水になっていきましたが、沖縄の戦後史の上からも特筆されるべき業績として記憶と記録に遺しておいてほしいと思います。教職員会設立についてです。申し上げました琉球政府と同じ52年に教職員会は設立され、その2年後に教育会館が建設されます。教育会館を建設するために資金融資を、琉球銀行にお願いをしたら拒否をされた。51%アメリカが、49%沖縄が、1%の違いで、反米的な復帰などの運動をしているところには金を貸さないと。そこで現在の海邦、当時の沖縄相互銀行です。具志頭徳助という頭取がおられて、相談に乗ってくれた。これで会館の建設が始まった。ですから今もって、私は学校用品株式会社の社長をしています。その義理を感じて、学校用品の日常的取り引きは海邦銀行を使っているんです。そのことは職員にもよく言い聞かせております。

それから、53年に「子どもを守る会」(会長屋良朝苗)を結成します。子どもの状況、本当に劣悪の中でいろんな問題行動等も起こりました。事件、事故も相次ぎました。親は子どもたちに目をやるゆとり等もなく、一方、子どもたちのための公的施設も皆無の時代に、子どもたちの夢の殿堂として、1966年に建設されたのが久茂地の「少年会館」でした。ところが、非常に残念なことが今年起こりました。少年会館は、復帰前のシンボリックな建物です。屋良会長が、53年の戦災校舎復興運動同様に、県内外に呼びかけ、強力な運動を展開した結果、1億7,000万円の、全国の児童生徒を含めての浄財を集めて建てたもので、歴史的にもすごい建物。子どもたちにとっては、沖縄と本土を結ぶ架け橋にもなった建物でした。これが那覇市に

よって解体をされた。私自身、沖大の加藤学長らと一緒に裁判を起しました。何とか仮処分申請をしてこの解体を止めようとしたのだけでも、我々の願いは叶えられませんでした。こういう歴史的かつ、文化的な、教育的な建造物が、いわゆる人為的に破壊をされたということも今年起こった残念なことでした。60年に沖縄県祖国復帰協議会が結成されます。これは復帰協と言っているんですが、初代会長の赤嶺武次さんは当時、官公労の委員長でした。現在の自治労、県職労の委員長でしたけれども、今年亡くなりました。初代会長に屋良朝苗会長をということが実はありましたけれども、屋良会長は53年に沖縄諸島復帰期成会の会長になるんですね。米軍の強い弾圧で潰されたということなどがあって、二度とこういうことが起こってはならないという本人の強い思いもあったようです。官公労の初代委員長の赤嶺武次さんが復帰協の初代会長になって、その後、2期目から長いこと喜屋武眞榮という、屋良朝苗の後の教職員会長、後で参議院議員になった喜屋武眞榮氏が引き継いでいくことになります。52年4月28日に効力を発したサンフランシスコ講和条約第三条による本土との分断を〈屈辱の日〉と定めたのは、復帰協結成翌年の「4・28県民大会」でした。復帰運動を高揚させる契機をつくったのが、63年4月27日の辺戸岬と与論島間で呼応する篝火大会と、翌28日の北緯27度線上における〈海上集会〉でした。以降、復帰運動は燎原の火のように、内外に広がっていきました。64年は、義務教育費獲得運動です。義務教育費獲得期成会(会長屋良朝苗)を結成して、沖縄の教育界の総力をあげての運動が展開されます。アメリカが施政権をもち、支配をしている地域でありますから、憲法も、教育基本法も適用されていない。だから教科書の無償配布もない。教員給料の半額国庫負担もない。校舎建築費等々もみんな自力。アメリカは民政優先と言いながら、実態は軍事優先でした。ですから、教育は二の次、三の次でした。教育はどんどん本土との格差が開いていく一方という中でこの運動を起こし、これが実は後でまた、65年に佐藤総理が来たときには結実をするということになるわけではありますが、そういう組織運動の拠点づくりをやったのがこの2番目でありました。

具体的運動とその成果についてです。これも多くは申し上げられませんが、ただ、特に若い皆さんもいます。「日の丸」掲揚運動もやったのか。右翼的な運動もやったのか。今に見たら本当にそう思います。僕なんかも旗持ちをやったんです。

63年の初めての27度線海上集会でも「日の丸」が振られました。復帰行進でもやっ
たんです。子どもたちにも「日の丸」の小旗を持たせて一体的にやったんです。じゃ
あなぜ。これは暇があったら後で。しかし非常に重要なことです。87年の沖縄国
体を視野に入れた85年からの政府文部省、自民党によるいわゆる「日の丸」君が代
の強制とは全く異質の問題。国体とその後の学校の卒業式・入学式等における「日
の丸」「君が代」に対しては、処分を覚悟で徹底的にたたかい抜きました。米占領下、
我々が目指したのは自由と民主主義を標榜しているアメリカが、何で「日の丸」の
自由掲揚を認めないのか。沖縄の子どもたちは、朝起きたらフェンスがあり、星条
旗しか見えない。60年代に教育研究集会の分科会で国民教育分科会というのがあり
ましたが、子どもたちの意識調査をしたら、びっくりしたことは11%が自分たち
の国籍はアメリカと答えたんです。日本教育をやったんですよ、やっっているが、
なおこういう子どもたちの意識状況。ですからもう掲げたのは、占領軍、為政者
に対する“抵抗のシンボル”として使ったという、ここだけはぜひ押さえておいてく
ださい。数多ある抵抗闘争から二例だけ紹介します。①「日の丸」掲揚についての
屋良会長とモーア高等弁務官の論争です。屋良がモーア弁務官に会って要請した
際、弁務官は「国旗は行政権のシンボルである。沖縄の行政権はアメリカが握って
いる以上、星条旗を立てさせてしかるべきである。それを強制しないのは、せめて
もの慈悲と思うべきだ。」と述べたという。これに対して屋良会長は「国旗はむしろ
民族のシンボルと考える。したがって、アメリカが行政権をもつ、もたないにかか
わらず「日の丸」掲揚の自由を許すべきである。」と主張し、譲らなかった。62年、
池田・ケネディ日米主脳会議の結果、戦後16年たって「日の丸」が学校など公共施
設にも掲揚できるようになりましたが、沖縄の不屈の抵抗闘争の結果、勝ち取られ
たものであります。②現在、学校の運動会で万国旗を見る機会があると思いま
す。復帰前、「日の丸」掲揚運動の中で、運動会場のポールに「日の丸」を掲げた例
が多くありました。アメリカの諜報機関（CIC）と琉球警察が来て、警告を発し、
降ろされる事態となりました。それではということで、編み出されたのが万国旗の
中に「日の丸」を立てるということでした。現在の強制の中でも、万国旗の中に
「日の丸」を見ると、強制力が薄められているようにも見えますし、抵抗闘争の名
残りかも知れません。あと（9）までいろいろありますが、その中で特に（3）の

「教育基本法」等、四法の民立法化とあります。アメリカが施政権、司法、立法、行政を握っている沖縄で教育をやる。本土の戦後は憲法・教育基本法体制ということです。民主教育、平和教育が進んでいる。こういう状況で何とせよ、本土の教育基本法を精神を引き継いで、ただし、「日本国民」という四文字を入れないことには沖縄ではどうしようもないんです。教育基本法の前文の中に日本国民を教育するという文言を入れて、当時の中央教育委員会、今の県教委。当時の立法院、今の県議会で、全会一致でやって立法化しようとしたら、もちろんその中心的働きをやったのは屋良教職員会長。ところが二度にわたって拒否をされる、廃案になるんです。立法院で全会一致で決めても廃案になるんですよ。三度目、実ったのが58年1月10日にこれが公布されました。三度目の正直で認めざるを得なかった。前文に「日本国民」を入れた教育基本法と学校教育法、教育委員会法、社会教育法の四法ですけれども。これはたまたま55年、56年をピークにあの島ぐるみの土地闘争の県民の怒りが大きく尾を引いて、もはや基地権力者といえども、それを拒否することができない状況を、いわゆる島ぐるみの戦いでこれをつくっていったというのが私の見方ですが、おそらくこれは間違いないと思います。そういうことで沖縄においてもアメリカが施政権を握っているんだけど、日本国民教育を堂々とやれた。実は屋良朝苗の、後で運動力学の中でも話しますが、布石論に通ずるんです、これが。この教育基本法を打ち立てて、獲得したために、65年佐藤総理が初めて沖縄に来て、「沖縄の復帰がなければ日本の戦後が終わらない」ということを言いましたけれども、その日各界、各層の陳情を、当時の琉球ホテルで受けます。屋良朝苗は教職員会長でありながら、義務教育費獲得期成会の会長として佐藤総理にこのことを改めて陳情した。屋良会長や周辺の話聞きますと、文部大臣を初め、アメリカの占領下において、こういう法律を獲得したのは大変なことだと、本当にびっくりしたそうです。要するに民立法で獲得したあの教育基本法前文の「日本国民」の教育が効いたわけです。ほかの陳情者にはまともな回答は一つもない中で、屋良会長には「わかった」という返事をくれた。事実、それは翌年から子どもたちの教科書無償配布等々が実現を見る。これは一つの大きな例ですが、屋良朝苗の布石論、目標を獲得していくための大事な布石論の話でした。それから(6)の「教公二法」阻止闘争から、主席公選、69年の佐藤－ニクソン日米首脳会談、それから日本復帰

と続いていきますが、教公二法阻止闘争、これももちろん多くを申し上げる時間はないかもしれませんが、私は、1999年3月に沖教組の委員長を61歳で退任しました。その前年の98年夏に「教公二法闘争史」という記録を世に送りました。これは当時、大田県知事から、あれだけの戦後最大の闘いをしながら、教公二法闘争史を今もって出版しきれないのは何事か、とひどく怒られたんです。私の前任者もいますけれども、31年ぶりに私の責任で発刊しました。この闘争史は全学校へ、それから各図書館へ、琉大とか沖国大とか、また全国の都道府県の教組関係に送りました。闘争史の最後の章は私が執筆しましたけれども、この間の闘いは大変でした。右翼、暴力団による福地担当部長への、刺傷事件だとか、県労協放火事件、社大党事務所荒しだとか、屋良会長の家は右翼が押しかける。いわゆる教職員会の強者、青年部を寝泊まりさせて、ずっとこういう状況がつづきました。私なんかも昼間歩けないぞという脅しも何回もかけられる。私が今申し上げてきたことは、復帰に反対をし、アメリカの甘い汁を吸った人たちがたくさんいる時代ですから、「日の丸」じゃなく星条旗を振ってアイゼンハワーを迎えるような人たちもたくさんいたんですよ。こういう状況の中で右翼が跳梁し暴力をふるうという、こういう状況の中で、琉球政府（松岡主席）と与党民主党は、米側の意を体し、屋良会長率いる教職員会、学校の教職員の活動を抑圧する反動立法を画策しました。「地方教育区公務員法」と「教育公務員特例法」の二法案ですが、法案の中に、「争議行為の禁止」「勤務評定の実施」「政治活動の禁止」があり、特に問題になったのが政治行為の禁止でした。アメリカが施政権をもっている占領支配下で、教職員の活動を制限、禁止しようとしたのです。立法化の意図については、教職員会のみならず、勤労県民大衆の怒りをもかって、戦後最大といわれた壮大な阻止闘争に発展していきました。教公二法阻止闘争という意義は、私は教公二法阻止、その勝利ナカリセバ、翌年の主席公選もないし、69年の佐藤-ニクソン会談、そして72年復帰という、それはなかったであろうというのが実は結論なんです。それだけ後の歴史づくりを切り拓いていった。沖縄の戦後史に金字塔を打ち立てたのが教公二法闘争。闘いの最後のところを申し上げますと、当時警察官は1,000名ぐらい動員され、立法院をガードしていました。対する阻止団は本島周辺の教職員を総動員しても9,000名ぐらいしかいないのに2万5,000名が集結したんですよ。最後の67年2月24日、警官をごぼう抜きにして、

立法院を占拠し、(廃案協定)を勝ち取ることができました。復帰運動を政治活動とみなして教公二法で禁止をしようとした為政者への怒りでした。もし、教公二法が通って、学校の教職員が抑圧されていたならばどうなっていたか。歴史は変わっていたと思うのです。教公二法阻止闘争は後でふれる「佐藤・ニクソン会談」による復帰の実現と不可分な関係にありますから、大衆闘争の教訓としてご承知おき願いたいと思います。では、次いきます。

屋良朝苗の運動力学について、さきほど布石論の話をしましたけれども、次に鈍角的態勢についてです。皆さん、鈍角というのは、(指で示す)これが鈍角の態勢ですね。一方鋭角。沖縄の茨は十重二十重に囲まれた鉄筋コンクリートのようなものであるから鋭利なものでは打開できない。だから鈍角的態勢で、鈍角的態勢は、指導部と勤労大衆、教職員で言えば組合員です。頂点の指導部と底辺の勤労大衆が接近してはくちやならない。この態勢でもってどんな壁であってもぶち当たり、ぶち当たり、ヒビを入れて壊して、そしてそれを乗り越えて目標を勝ち取っていくというのが屋良朝苗の鈍角的態勢の運動力学、運動理論です。これは、私の言葉で言えば、大衆路線ですね。屋良朝苗が主席公選で東京の美濃部知事に会い、横浜で飛鳥田市長に会い、京都で蜷川知事に会ったときに、それぞれ大変な励まし、示唆を受けましたが、私の印象に一番強く残っているのは蜷川虎三京都府知事でした。どんなことをおっしゃったかと言うと、「志は高く俗につけ」と言ったんです。これには屋良先生も大ききうなずきました。つまり屋良が高い志をもって、復帰や子どもたちのこと、教育等、県民課題に取り組んできたのは、正に志は高く俗につけという、大衆路線ですよ。決して指導部と大衆が離れちゃいかん、分断されてはいかんです。ですからこれは、このことは今に通ずると思うんです。55、56年をピークに闘った、あの島ぐるみの土地闘争もいい例だと思います。

それから屋良は科学者であって、物理の教師でありましたので、遠心力と求心力という話もよくやりました。求心力がしっかりしないことには、遠心力を發揮して物事を切り開いていくことはできないと。それから当時、教育研究集会の合い言葉の中に「一人の百歩前進より百人の一步前進を」ということがいわれました。これは私は、社会主義的な道徳律かなと思ったりもしましたが、とにかく大衆路線ですね、これも。こういう組織的、道徳律なども示しながら当時の教職員会を引っ張っ

ていった。前後しますけれども、当時、52年の沖縄教職員会、これは復帰直前の71年9月29日に解散をして、翌日の71年9月30日から沖縄県教職員組合に変わっていきますが、当時の教職員会は学校に勤めるすべての教職員です。校長から管理者とかの区別なく、大多数の教師と事務職員、用務員まで、すべてを組織し、そして公私立、幼稚園から小・中・高・大学、公立、私立すべてを含めた網羅組織でした。だから強かったんです。後で触れますが、かつて強かった組織が復帰によって否応なく本土の法制度が適用され、管理体制も強化されたために、復帰前の自由で想像的な職場の雰囲気も無くなってしまいました。これが現在の教育現場の状況なんです。

屋良語録、屋良朝苗の信念、心情というものも、これも資料として添えましたので、ここでは詳しく触れませんが、「復帰40年」を検証する。ここから、あるいは今の闘いにぜひ、活かしていくべき、みんなで一緒に考えていくべきことだと思ってこういう掲げ方をしました。私たちの復帰要求はただ日本に復帰すればいいじゃないんです。即時無条件全面返還でした。当時、基地のない宮古・八重山は先に返還していいのではないかという地域別分離返還というのがありました。また、教育と戸籍などは、これも基地に直接関係ないから機能別に先に返していいのではないか。これは当時、森総務長官の森構想と言われました。屋良会長も森構想を一定評価しましたが、組織内で論議を重ねまして、到達したのが復帰協の即時無条件全面返還でした。核も、基地も一切認めない。これを掲げて実は屋良朝苗は主席公選をメインのスローガンに掲げて闘ったんです。これは復帰に対する県民要求であったということをぜひ押さえておいて下さい。そしてこれに向けて具体的に69年の日米首脳会談で72年沖縄返還が確定しましたので、政府は7つの沖縄復帰関連法案の審議に入りました。当時の琉球政府の意向など全く聞こうともせずに、審議を急ぎました。屋良琉球政府としては、日本政府や国会関係などあらゆる情報をキャッチして、対抗するものを仕上げたのが「復帰措置に関する建議書」なんです。これは琉球政府の広報誌としてまとめられました。沖縄県民各界、各層の復帰への思いを込めて、核も基地もない平和な沖縄にしてほしい。政府に突きつけようとした。

このこととの関連ですが、皆さん、一昨年、2010年12月21日のNHK、テレビ

をごろんになった方いませんか。「歴史は眠らない、沖縄・日本400年 ―沖縄返還への道」というもので屋良朝苗にスポットを当てた特別番組が製作され放映されました。吉田功というディレクターが担当したものです。私も数回会いましたが、これまで映像や活字などで明らかにされていない、屋良の本音・屋良朝苗の対日本観、これを知りたい、メスを入れたいと、そこで注目したのが「屋良朝苗日記」なんです。ですから1971年11月17日の屋良朝苗日記には、私も別の論壇などでも書きましたけれども、あのNHKの映像の中にも出てきますが、建議書を携えて、羽田空港に着いたころには衆議院の沖縄返還協定特別委員会で強行採決されていました。特別委員会では、まだ瀬長亀次郎、安里積千代両議員の意見陳述も終わらないうちに、与党自民党議員が動議を出して強行議決した。沖縄の復帰に関する法案ですよ。屋良主席は「建議書」に託した県民の復帰要求を政府や国会に事前に届けることができなかった。翌日、佐藤総理や関係閣僚にも厳重に抗議をし、衆参両院関係者に抗議をしたあと、提出する羽目になりました。その日（11月17日）の屋良日記の中には、「沖縄県民の思いというものは弊履のようなもの」とある。私自身、弊履の意味がわかりませんでした。辞書を引っ張ってみると「破れた草履」とある。履き捨てた草履のような扱いですよ。弊履のように扱われた屋良の失望や怒りについては、察するに余りあるものがある。ですから屋良朝苗日記はそういう流れの中でぜひ今後も続きますから、見てほしい。「一条の光」屋良日記の27回目は建議書に関する特集です。これは要するに、見出しとしてもあげてありますが、核も、基地もない沖縄を求めるとというのが基本です。自衛隊配備や日米安保に反対し、沖縄の自己決定権を建議書の中できちっと求めている。今、我々がこれから求めているとするものはまさにその精神ではないでしょうか。

さて、沖縄がそういう即時無条件全面返還、核も、基地もない平和な沖縄を求めたことに対して、本土政府の対応はどうだったか。これもずっと沖縄の両新聞を初め、復帰運動に関わった人たち、研究者の皆さん方も指摘されているとおり、政府は「核抜き本土並み」を約束した。在沖米軍基地に在る、核を抜きますよ。本土並みに基地を整理縮小する、というのが当時の約束です。しかし全く逆な方向。ということは69年11月21日の佐藤―ニクソン会談の秘密合意というのが次々出てきましたね。核の再持ち込み、それから在沖米軍基地の自由使用です。オスプレイ問

題、その他の米軍基地関係問題、すべてここに根源がある。ですから復帰の闘いと日米の対応というものを検証、分析をして、今後の闘いに活かしていかなければなりません。若泉敬という京都産業大学の国際政治学者が『他策ナカリシヲ信セント欲ス』という告発本を出しましたね。沖縄返還交渉で佐藤総理から特命を受けて米側と交渉した彼は沖縄県民が満足していない、これに対して心を痛めたんですね。ですから摩文仁で自裁をしようとしたんですよ。ところが思いとどまって出したのが、「他策ナカリシヲ…」というあの告発本。これを出せば日米交渉の裏取り引きの内幕ですから、佐藤自身がびっくりをし、県民要求にこたえるであろうと彼は期待した。ところが佐藤は応じなかった。そこで彼は次の手を打ったんです。今度は英語版にする。その執筆のために彼が選んだのが与那国の民宿でした。私は1週間前に与那国へ行ってきました。あのことを思い出して、ぜひどの民宿だったか知らせてくれと頼んでおきました。沖縄県民を騙して、核密約と基地の自由使用の日米合意に対して、復帰協は欺瞞的返還と糾弾しました。ですから72年復帰は日米共同声明路線による欺瞞的な沖縄返還なんです。沖縄の復帰は、「本土の沖縄化」を招き、「沖縄の本土化」を招く結果になったことは復帰協が警告したことでした。核を隠した沖縄が、不沈空母のような沖縄が返還されたために、核安保体制に、日米安保体制自体が変質をした。加えて日本は軍拡にも利用した。本当にこれは断腸の思いですよ、復帰闘争をやってきた者たちからすれば。ことごとく県民要求が逆手に取られた。残念ながら日本政府の姿勢は今日でも変わっていません。

「復帰40年」で沖縄（教育）が失ったものと書いてありますが、我々が教公二法阻止をしたことで教職員の身分と権利に関わることで、政治行為は自由、争議行為は権利として獲得をしておく、勤務評定まかりならないということで、米軍占領下でありながら獲得しました。しかし、復帰によってすべて本土の法制度下に組み込まれて剥奪されてしまう。教育委員制度も沖縄は公選制だったんですよ。民主的な公選制を占領下の沖縄で守っていた。これもすべて任命制に変わった。考えたらおかしいですね。復帰をした、平和憲法、教育基本法体制下で恩恵を享受し、人権も保障されると思って復帰運動を、帰ったらそういう国ではなくなっていた。これは配布されている28日の私の論文を改めて見てほしいと思います。そこまで尻をまくらなければいけない時期に来ているのではないかと、というのが私の今の到達点で

す。

今日は、普天間基地に隣接する冲国大でのお話ですので、2003年8月13日の「CH53大型ヘリコプター墜落事件」についてもふれておきたいと思います。8月13日は、伊波洋一市長の訪米報告会の日でした。私も宜野湾市の基地対策協議会の委員をしていましたので、報告会を公開で開催した直後に、ヘリ墜落のニュースが入ってきました。市長以下、直ちに冲国大の墜落現場に駆けつけました。すると、どうでしょう。墜落現場を指揮しているのは、我々が日頃占領軍と糾弾してきた普天間基地の米軍ではありませんか。「中に入れろ」「ここは大学で、民有地だ」と激しく抗議するも、中には入れませんでした。その時の怒りは、ここ沖縄は、いまもって米軍の占領地か！日本の憲法や主権、警察権も及んでいないのか！というものでした。人命、財産を守る責務のある沖縄県警が、警察権行使もできないという惨めな姿を見せつけられ頭が混乱しました。日米両政府による日米安保条約と地位協定に守られる米軍と、日本国憲法体制下でも守られない沖縄の地位、沖縄はやっぱり米軍の占領地、軍事植民地であることを実感させられた、ヘリ墜落事件がありました。

近年、新聞等で構造的差別という文言が目につきます。日本の沖縄に対する差別については、私は近現代史的立場で捉える必要があると考えます。沖縄は1879年、明治政府の軍隊と警官隊によって武力併合（「琉球処分」）され、尚泰は東京に連行（拉致）されました。「命ど宝」の言葉は、歴史家山里永吉原作の「首里城明け渡し」という沖縄芝居の中に出てきます。尚泰が那覇港で王妃や臣下との別れの場面で詠んでいます。命ど宝という言葉は、作者が尚泰をして「戦世ん終まち弥勒世んやがて 嘆くなよ臣下命ど宝」と言わせたのかも知れません。

明治政府（日帝）の武力併合の目的は、南進政策の拠点づくりにありました。1910年からの朝鮮の植民地化は、大陸への橋頭堡づくりが目的でした。軍隊が駐留した沖縄は、先の戦争で日本本土（皇土）を守るための「捨て石」に利用されました。いま平和憲法体制下で沖縄に安保の犠牲を背負わせて恥じない、これが日本という国家です。根源は、先のアジア・太平洋戦争といわれる侵略戦争の総括がなされず、反省のないところからきています。沖縄や侵略を受けたアジア諸国からは

良く見えるのですが、大多数の国民は目を覚まさず、国家権力のなすがままというところに、この国の不幸があります。

ひるがえって、沖縄に対する日本政府の姿勢です。オール沖縄の〈建白書〉をもつての要求にも聞く耳をもたず、オスプレイを強行配備しながら負担軽減という。普天間の危険性を放置しながら、辺野古への新基地建設を認めなければ、普天間は固定化するという。自民党所属の三人の国会議員に対して「辺野古移設」を認めなければ、離党勧告も示唆するなど、手段を選ばない。それほどまでに辺野古にこだわる理由は、そこには既に大きな辺野古弾薬庫があり、天然の良港・大浦湾が隣接していることで、新基地をつくれれば、嘉手納以上の軍事拠点になることは、火を見るより明らかです。そして隠された狙いは、私は近い将来の日本軍基地化にあると見えています。

一方、尖閣を煽っての与那国への自衛隊配備が進められています。将来的には先島への二万人超とも言われる自衛隊配備が狙われています。在沖米軍と自衛隊の装備も年々近代化で強化されていて、そうなると、沖縄は復帰前の米軍基地以上の“基地の島”にならないか憂えるものです。

復帰について、屋良朝苗は県民大衆と共に「核も基地もない平和の沖縄」を求めて県民の先頭に立って奮闘するも、県民要求は叶えられませんでした。改めて屋良朝苗が私に託した遺訓をお伝えしたいと思います。「勝ち取った復帰であったが、県民が求めた復帰にはならなかった」ということ。「復帰の中味(核も基地もない沖縄)を勝ち取るのは君たちの大きな責務だよ」(石川に対して)「沖縄は二度と国家権力的手段(「物」視されて)として使われ犠牲を被るようなことがあってはならない」ということです。心に刻んでいただければ有難く思います。

本日は、沖国大のお計らいで「復帰40年」屋良朝苗が遺したもの——ということで、お話をする機会に恵まれ、感謝にたえません。思いは余って、意は尽くせませんでした。屋良先生の足跡から沖縄の明日を拓くヒントを探し出していただければ幸いです。

なお、「屋良朝苗日記」や屋良朝苗関係の貴重な資料や文物、また教育会館の〈資料室〉に保管されていた歴史的資料なども既に読谷村に寄託されています。歴代村長との約束もあり、近い将来「屋良朝苗記念館(仮称)」が戦後学習館的な顔をもつ

てオープンすることを期待しています。

ご静聴ありがとうございました。(拍手)

質疑応答

○質問者

日常いつも石川先生とはお付き合いしていただき、『赤木』にも書いていただきましたが、このように改まったお話を聞くのは初めてで、大変興味深く聞きました。私の質問は、石川先生が投稿された琉球新報の10月28日の論壇「復帰後も後絶たない米兵犯罪」で「日本への決別と、独立という住民意思を突き付けるなど、万国津梁の民の気概を示す必要がある。」と書いてありましたが、それと関連するのですが、1997年頃、上原康助氏が国会議員だった頃、新聞に、沖縄は独立する場合にどんな手段があるか、どんな手続があるかということを予算委員会で質問したら、法制局長が憲法上そんな規定はないと言って一蹴されてしまったというような小さなベタ記事が載っていました。そのことが、私の頭にこびりついています。これを上原康助氏に詳しく聞こうと思ってお電話を差し上げたら、国会からそのときの文書をコピーで取り寄せてくれました。やっぱりそういうことが書いてあります。こんなに沖縄は、戦前から戦中、それから戦後、今に至るまで、我々は何度政府に要請しても、何を要請してもすべて弊履のように、退けられる。これはどうしたらいいかということになってくると、独立しかないんじゃないかということを行っているんです。当時の上原康助国会議員がですね。そうしたら法制局長はそんな規定はないし、これはだめですということを返答しています。実は屋良先生が、1990年頃の春か秋の園遊会に呼ばれ、裕仁天皇と会っている写真があります。このことを考えてみますと、天皇のマッカーサーへの進言がありますね。沖縄は25年から50年、日本に主権をおいた形でどうぞ借りてください。そのことは両国に大変ためになりますということで進言をしているんです。進藤栄一という教授が書いたものが『世界』に載りました。そこで私の質問ですが、もし屋良朝苗先生がこの事実を知っていたら、どういうことになっただろうかという、質問です。長い質問になりました。よろしく願います。

○講師 (石川元平)

結論だけ申し上げて、恐らく屋良先生は47年ですからね、天皇メッセージはね。そのことだろうと思います。恐らくそのことについては御存じなかったのではないのかという。このことの思いは直接お聞きすることはできませんでしたが、しかしやっぱり、私、屋良先生紹介のときに、不屈だけでなくして、反骨の、そういう気持ちを強く持っておられたというお話を聞きましたけれども、とにかく、例えばすごい難題あるときは、冬でも自宅の畳の上、ベッドではおやすみにならないんですよ。身を寒風にさらして、屋良家の玄関は石張りですけども、そこで煩惱苦悩しているという話を何度も御家族からお聞きしましたけれども、ですから弊履のように扱われたという思い、現在の政権を担っている権力の側に対する思いはすごいものが実はありました。あと、十分申し上げられませんが、私はあの28日の論壇は一つの問題提起なんですよ、一石を投じて、いろんな論議してほしいんです。琉球自治州の会に属していますが、そこの平和外交政策は、一応私が担当して書いてあります。あれは大田県政時代の基地アクションプログラム、そして国際都市形成構想等々も参考にしながら書いたもので、要するに結論的には日米関係、対米従属の関係をどう改めるのか。対米従属をどう断ち切るのか。実は沖縄からの安全保障問題も、原発に関わる核の問題も、TPPという、これは農業だけじゃないですね、これはすべて根っこは、根源はアメリカですよ。アメリカからのそれを一所懸命守ろうとして、その姿が脱し切れない、民主党になってますます悪くなっている。ですからアメリカにそこは足元を見られているんですね、日本の今の政権は。等々ありますから、どう本当に対米従属を断つための各界、各層の勤労大衆がこの国の立て直しのためにいろんな機会を利用して立ち上がるのか。ある意味で普天間を中心とする沖縄の決起は一つの重要な全国への提起にもなっていると思います。直接的な答えにはなりませんでしたが。